



“道内最優秀”の貝塚を掘る —伊達市若生貝塚—

伊達市噴火湾文化研究所・学術研究支援員 永 谷 幸 人

「北海道最優秀の遺跡である」

こう評される遺跡が伊達市内にあることをご存知でしょうか？その遺跡の名は「若生（わっかおい）貝塚」。いまから約6,000年前の縄文前期につくられた大規模な貝塚を有する集落遺跡です。

噴火湾東岸は道内有数の貝塚集中地域としてしられており、伊達市噴火湾文化研究所もこれまでに多数の貝塚の調査・研究をおこなってきました。

2014年度からは、道内外の研究者と連携して若生貝塚の学術調査を開始しましたので、発掘調査の概要を紹介します。

若生貝塚の立地

若生貝塚は、北海道伊達市若生町・東有珠町・南有珠町にまたがる丘陵に位置しています。標高は約53mで、推定される旧海岸線までは約1kmもの距離があります（図1）。

若生という地名は、アイヌ語で「水の湧くところ」を意味するワッカ・オ・イを語源としており、遺跡の麓の湧水点からは、いまも豊富な水が流れつづけています。縄文人にとって湧水点は、生活に必要な水を得る場所としてだけではなく、新たな生命のうまれる場所として大切にされていたのではないかと言われています。縄文人たちが海から離れたこの地を生活の

場として選んだことと湧水点が存在することとは無関係ではないと考えられます。

若生貝塚における調査・研究の歴史

若生貝塚での最初の調査は、大正末期頃にN・G・マンローによっておこなわれた現地踏査と遺物採集であるといわれています。

その後、1950年6月に、伊達高校郷土研究部員の踏査によって4カ所の貝塚（A～D地点）が発見されました（図2）。同年8月には、峰山巖率いる伊達高郷土研究部によるA地点貝塚（1m×3mの範囲）の発掘調査がおこなわれ、貝層の厚さが2.6mにもおよぶ貝塚が良好な状態で保存されていることが明らかになりました。

1952年8月には、峰山・伊達高郷土研究部、そして当時北海道大学助教授であった名取武光によって、再びA地点貝塚（4m×4mの範囲）が発掘されました。この調査で確認された貝層の厚さは3mで、貝塚がつくられた時期が縄文前期であることが判明しました。さらに、貝層の下には縄文早期の土器が出土する包含層が存在するとされています。

以後、発掘調査等はおこなわれてきませんでしたが、1999年に土地所有者が畠地の巨石を除去した際に貝塚が露出したとの連絡を受けた伊達市教育委員会



図1 若生貝塚の位置



図2 各貝塚の位置

表1 各貝塚の時期

貝塚の形成時期	出土土器
A地点 縄文前期	静内中野式・円筒下層式
B地点 概ね縄文中期～晩期	北筒土器系・亀ヶ岡式系
C地点 概ね縄文中期	円筒土器系・北筒土器系
D地点 概ね縄文晩期～続縄文期	亀ヶ岡・恵山・後北式土器系
E地点 縄文前期	静内中野式・円筒下層式

(名取・峰山1957、小島・青野1998を参照した)

によって、遺物の回収作業が実施されています（E地点）。

これまでに発掘調査をおこなわれているのはA地点貝塚だけですが、各調査で採集された遺物の年代によって、各貝塚のつくられた時期が明らかになっています（表1）。

以上のように、若生貝塚では縄文前期の大規模貝塚が保存状態よく存在し、さらに、縄文前期から続縄文期にいたるまで、地点を変えながら連綿と貝塚がつくられています。

1951年に出土遺物の鑑定と遺跡の現地視察をおこなった名取武光は「層位的研究に於いては北海道最優秀の遺跡である」（萱場1952）との評価をあたえています。

「北海道噴火湾沿岸の縄文文化の基礎的研究」

今回の発掘調査は、噴火湾沿岸地域の環境変遷とそれに伴う人間活動の特質を明らかにすることを目的とした科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北海道噴火湾沿岸の縄文文化の基礎的研究」（研究代表者：青野友哉）の一環としておこなわれたものです。

噴火湾沿岸地域は、①活発な火山噴火を繰り返す駒ヶ岳と有珠山があり、植生の変化が著しい地域である、②噴火湾は水深が100mと浅いため、暖流と寒流の影響を受けやすい海域である、という地域的特性が

あります。こうしたことから、本地域は自然環境の変化と人類への影響が顕著に現れる地域であると考えられます。

そうした自然環境の変化や人類の環境適応について考えるうえで、貝塚研究はきわめて有効です。貝塚から出土する貝類・魚類・哺乳類といった動物の生態などから、当時の自然環境とその変化を復元し、人類がどのように環境に適応して資源を利用していたのかを推測することができるからです。また、貝塚の中の土壤や花粉などの分析もあわせて実施することで、植生の時期的な変化をより具体的に把握することもできます。

そこで、今回は1952年に峰山らがA地点貝塚で発掘調査をおこなった調査区（4m×4m）を再発掘し、土層観察と図面作成をおこなうとともに、動物遺存体や土壤（花粉やケイ酸体）、年代測定用の各種サンプルを採取することとしました。

2014年度調査の成果

2014年度の調査では以下の成果が得られました。

①貝塚の保存状態の確認

1952年の調査時には約3mの厚さがあった貝塚の上部は、畑の耕作によって1mほど掘削されていましたが、遺存している部分の保存状態はきわめて良好です。

②貝塚の形成時期の再確認

貝層断面からは縄文前期の初めから中頃の土器が出土しており、約6,000年前の貝層であることが確認されました。ただし、今回の調査では旧調査区（4m×4m）の全体を掘り上げてはいないため、貝塚



写真1 旧調査区（1952年）の再発掘調査風景

のもっとも古い部分を確認できていない可能性があります。また、貝塚の下に縄文早期の包含層が存在するといわれていますが、今回の調査では早期の土器は出土しませんでした。2015年度の調査によって旧調査区の全体像を把握したいと考えています。

③灰になった貝殻の層の発見

1952年調査の報告書によると、A地点貝塚の貝層は8層の火山灰によって区切られているとされています。しかし、今回の調査によって、それらは火山灰ではなく、有機物を含む土壤や焼土、灰になった貝殻であることが判明しました。そのなかでも、かなりの熱をうけて漆喰状の灰になった二枚貝とおもわれる貝殻の層が注目されます。今後、類例を探索し用途や目的などの検討をすすめていきます。

④貝塚形成以前の土地掘削

貝層直下の土層を観察したところ、貝塚の形成以前にこの場所が人為的に掘削されていたことが明らかになりました。この人為的な掘削が縄文前期以前の竪穴住居などの遺構構築によるものか、あるいは広範囲にわたる造成（整地など）によるものか、2015年度以降の発掘調査で解明していきます。

⑤貝塚範囲の一部確定

再発掘とあわせて実施したボーリング調査によって、貝塚の広がりは東西（等高線に直交する方向）が約20mであることが判明しました。南北（等高線に平行する方向）の範囲は未確定ですが、地表面の貝殻の散布状況や、畠地の造成による貝層断面の露出箇所などから、30m以上であると推測されます。このように等高線に沿う帯状の貝塚は、同じ縄文前期の北黄金貝塚などにもみられます。

⑥現在おこなっている分析

現在、以下の分析をおこなっています。

- A：陸獣骨の14C年代測定（各貝層の時期決定）
- B：動物遺存体の種同定（人間活動と環境の復元）
- C：擦石付着デンプン粒分析（植物遺存体の検出）
- D：花粉分析（遺跡周辺の環境復元）

これらの結果は改めて報告します。

今後の課題と展望

これまでの調査では、貝塚の周辺に存在したと考えられる住居址や墓は検出されていません。これまで述べてきたとおり、貝塚からは多くの情報を得ることができますが、それも人間活動の一端にすぎません。人間活動の総体を理解するためには、貝塚の調査とともに、これら集落を構成する遺構を把握する必要があります。そのためにも、より広域な地形測量やボーリング調査をおこなっていきます。

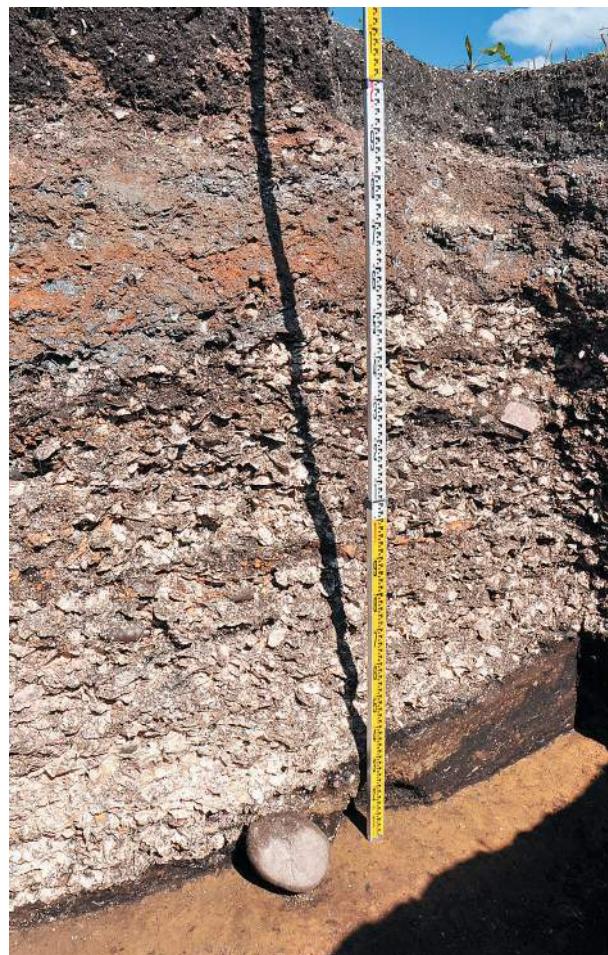


写真2 A地点貝塚の断面
カキやウニ、シカの骨などが焼けた貝の灰とともに積み重なっている

伊達市噴火湾文化研究所は、「最優秀の貝塚調査」と呼ばれるよう、若生貝塚の調査研究を鋭意すすめたいきたいと考えています。2015年夏には、今回の調査で得られた成果を踏まえた第二次発掘調査を実施します。調査期間中には現地説明会を開催する予定ですので、是非ご参加ください。

【謝辞】調査にあたって次の方々からの協力と調査指導を賜りました。

伊達市在住 刑部平逸氏、元伊達高校郷土研究部員 竹田輝雄氏・萱場敏郎氏

なお、この成果はJSPS科研費26284125によるものです。

【主要参考文献】

- 青野友哉・永谷幸人2014「伊達市 若生貝塚－縄文前期貝塚の再発掘調査－」『2014年度遺跡調査報告会資料集』北海道考古学会.
- 萱場敏郎1952「伊達町若生貝塚発掘報告」『噴火湾沿岸の縄文文化遺跡』北海道伊達高等学校郷土研究部.
- 小島朋夏・青野友哉1998「北海道伊達市若生貝塚出土の貝製品について」『動物考古学』第11号.
- 名取武光・峰山巖1957「若生貝塚発掘報告」『北方文化研究報告』第12輯、北海道大学北方文化研究室.